The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴 : 「自分らしさ」という視点から
Author(s)	中山, 亜紀子
Citation	阪大日本語研究. 2007, 19, p. 97-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』 19（2007）

韓国人留学生のライフストーリーから見た日本人学生との社会的ネットワークの特徴―「自分らしさ」という視点から

Sense of Self and Friendship: Accounts of Korean Students in a Japanese University

中山 亜紀子
NAKAYAMA Akiko

キーワード：日韓共同理工系学部留学生、ライフストーリー、社会的ネットワーク、アイデンティティ、自分らしさ

【要旨】

留学では、現地での社会的ネットワークの構築が言語習得に重大な影響を与える要素の一つと考えられている。しかし、社会的ネットワークの構築はすべての留学生にとって容易なことだとは言えない。本稿では、日韓共同理工系学部留学プログラムで留学してきた韓国人留学生を対象にインタビューを行い、ライフストーリーを作成した。そのライフストーリーからは、研究協力者と日本人の友人との社会的ネットワークには「互恵的」という特徴があることが明らかになった。また、「遊び方の共有」と「未来の共有」という2点が、ネットワークの中で「自分らしい」と感じられるかどうかに大きな影響があることがわかった。

1．はじめに

多くの言語教師ならびに学生が、「生きた」言語に触れる機会である留学に多くの期待を寄せている（Freed, 1998）。目標言語に接触する機会を左右するものとしてしばしばとりあげられるのが、留学先での社会的ネットワーク（以下、ネットワーク）だ（Isabella-Garcia, 2006）。90年代には日本語教育の分野でもこのネットワークの研究がさかんに行われていた（日本語教育学会，1996、1997など）。これらの研究は、日本語学習の役に立つネットワークの特徴を調べて、その分布を考えたり、ネットワークの配置を上手くコーディネートしようといった即利的な考え方に基づいていたが、現在ではネットワーク自体を対象にした研究はほとんど見られなくなっている。

一方、留学の成果だけに注目して、留学という体験そのものに興味が注がれてこなかっ

たという反省が起こっている。そこでは、留学生が新たな出会いをどのように感じ、生活の中でいつも目標言語に浸れる状況をどう見ているのかという観点が欠落していたことが指摘されている（Wilkinson, 1998）。そのような指摘に符合するように、学習者がいつ、どこで、だれと、どのように接触し、そしてどのように感じているのかを丁寧に追おうとする研究も多く見られるようになってきた。ダイアリースタディやライフストーリーを使って、留学生が母語話者との関係の中で色々な感情を持つこと（Choi, 2002）、留学生の主観（Siegal, 1996）やジェンダー（Polanyi, 1995、Kinginger & Whitworth, 2005など）が、母語話者との関係や言語習得に質的に大きな影響を与えていること、また、あるネットワークへのアクセスの可能性やそこでの疎外が、学習者のアイデンティティの（再）構築に大きな影響を与えていること（Kinginger, 2004）などが明らかになってきている。

これらの研究に共通するのは、留学生の感情、アイデンティティ、ジェンダーなどは、留学生その人に本質的に備わった不変のものではなく、学習者と彼／彼女を取り巻く他者や環境との関係の中で（再）構築されるという視点だ。さらにそこには、社会的政治学が働いている（Pavlenko & Blackledge, 2004: 13）。言い換えれば、言語習得、またネットワークの構築とは、学習者と「学習環境」との政治的・経済的・社会的な関係の中から生まれてくるものだという見方だ。

本稿では、以上のような視点に立ち、学習者と「学習環境」との双方を視野に入れることができる射程の長さを持った用語として、この「社会的ネットワーク」を用いる。そして、性急な一般化ではなく、学習者が個々のネットワークとどのように付き合い、そしてその関係をどう感じているのかライフストーリーを使って明らかにする。その際ライフストーリーを物語的自己アイデンティティを構築するものととらえ、その物語の中に見られる「自分らしさ」という観点から、留学生の大学における社会的ネットワークの特徴を考察してみたい。

2．本稿の立場

留学生や移民など越境者の第2言語習得研究に新たな展開をもたらしたのは、Nortonであろう（1995、2000ほか）。従来、学習者の目標言語社会に対する態度や動機付け、文化的距離が、「自然習得状況」における言語習得の成功を左右すると考えられてきた（Spolsky, 1989、Schumann, 1978）が、彼女は自然習得状況における言語学習とはそれほど単純に考えることができないことを明らかにした。その際、彼女は「文化的資本」と

いう概念を取り入れた。文化的資本という概念は、ある特定の場所で価値を持つ「知識や考え方」（Norton, 2000: 10）のことであり、教育や趣味、言葉などを指すことができる。資本を持つものは中心に位置し、持たないものは周辺に押しやられる。Norton はカナダ在住の移民女性 5 人の話から、彼女らが職場などで周辺化されたために、文化的資本である英語と接する機会がいかに制限されているかを描いた。

もう一つの Norton の功績はアイデンティティという概念を取り入れたことだ。Norton 以前にも、社会言語学とバイリンガリズムでは、アイデンティティと言語の関係に研究の焦点があてられていた。それは言語の選択とパーフォーマンスがアイデンティティを指標するという前提に立っていた（Pavlenko & Blackledge, 2004: 9）。しかし、Norton のアイデンティティは、Weedon（1987）の Subjectivity 概念の援用であり、アイデンティティとは、ある人の本質的で独自で固定的で一貫した核ではなく、「多様で、時に矛盾し、ダイナミックで、時間と空間とともに変るもの」（Norton, 2000: 125）である。このアイデンティティ概念を使うことによって、場所（site）によって、時間によって刻々と移り変わる学習者と彼／彼女を取り巻く環境との関わりが見えてくるのである。

このようにアイデンティティとは、常に特定の場所や言説の中で構築されるものであり、そこには常に誰が資本を持ち、力を持っているのかといった政治的な経済学が働いている。アイデンティティとは、「もはやなんらかの社会的属性をしめすものであるというよりもむしろ、「私はなにものであるか」といった問いを巡って、文脈に応じて行為主体によって選び出され、自己呈示のため、あるいは自己を守るために即興的に立ち上げられ、投企されるものなのである」（保坂, 2000: 425）。言い換えれば、「アイデンティティはそのつど行われるローカルなプロジェクトとして構成されている」（Bamberg, 保坂, 2000再引：431）のである。

本稿は以上のようなアイデンティティ観を踏襲しつつも、しかし、それだけでは十分ではないと考える。Norton（2000）では、老人介護の仕事の中で、英語を話すという目標を達成しながらも、その仕事を辞め、より自分らしい専門職につくために学校に戻った Katarina という移民が紹介されている。Norton（2001）は、Katarina が「専門職女性」という想像の共同体に属したかったのだと説明しているが、これだけではなぜ Katarina にとって「専門職女性」でいることが重要なのかが十分に説明できない。つまり、その都度「即興的に」立ち上げられるアイデンティティばかりを問題にしていたのでは、Katarina が老人と英語で話すときの葛藤が説明できないのだ。この問いに答えるためには、Katarina の人生を遡って考える必要があるのではないだろうか。アイデンティティをその時、その場で構成されるものだと考える考え方を横のアイデンティティだとすれ

ば、時間軸を通じて構成される縦のアイデンティティもあるのではないか。それらは車の両輪のような関係であり、アイデンティティにはどちらも必要なのである（Bamberg, 2000）。

ここで言う縦のアイデンティティとは、物語的自己同一性（Narrative Identity）（リクール, 1990）のことである。物語的アイデンティティとは、過去の出来事をあるプロットに当てはまるように取捨選択して並べなおして作られた物語（ライフストーリー）によって構築される。この物語では、現在の自分に至るまでの道のりが語られる。そして「私とは何者なのか」という問いに答え、その人の「自分らしさ（sense of self）」を伝えてくれる（Novitz, 2001: 145）。さらに、物語は過去から現在に至り、主人公が向かう未来へとつながっていく。それがどれほど一時的なものであろうと、多くの人は、過去を語り、物語にすることで人生のつながりに関する一貫性の感覚、つまり「未来・現在・過去を包摂する全体」（フランク，2002: 92）を得ることができる。

浅野（2001）はこの物語を「自己物語」と呼び、その大きな特徴の一つとして、自己物語は、物語の一貫性や完結性を突き崩してしまうような「語り得ないもの」をはらんでおり、これを隠蔽し、見えなくすることによってはじめて首尾一貫性が産み出される（前掲書：15）ことを挙げている。「自己物語」をこのような特徴を持つものとして考える際、特筆しておくべきことは、自己物語を語ることによって構築される物語的アイデンティティとは、安定し、首尾一貫した同一性ではないということだ。同じ出来事について、いくつかの筋を創作することが可能なように、自分の人生についても異なった筋を織り上げることが可能なのであり、絶えず作られたり、壊されたりし続けているものだからだ（リクール, 1990: 452）。

また、桜井（2002）は、ある社会で支配的な語りを「マスター･ナラティブ」、あるコミュニティで特権的な地位を占める語りを「モデル・ストーリー」と呼んだ。物語を語る時、また物語を聴くとき、人々はマスター・ナラティブを参照しながら語り、また聴く。この語り手と聴き手に共有されたマスター・ナラティブは、リクールのミメーシスⅠと同一である（リクール，1987）。ここから、さらに、ライフストーリーを語る際の他者の重要性が指摘できる。ライフストーリーを語る時、語り手は他者が納得の行くように語らなければならない。なぜなら、「物語が聞き手に受け入れられるということは、その評価を共有するということでもあ」るからだ（浅野，2000: 11）。この過程がなければライフストーリーによって物語的アイデンティティが構築されることはない。物語的アイデンティティとは、もともと他者の理解可能性を前提に維持されるものなのであると言ってもいいだろう。

以上のことをまとめると、異なった時期に、異なった聴き手が聞けば、違うストーリーが語られるだろうことが指摘できる。あるライフストーリーとは、その人のライフストーリーのバージョンの一つに過ぎないのだ。繰り返せば、ライフストーリーに完成形はありえないのだ。

3．調　査

調査協力者は、日韓共同理工系学部留学プログラム（以下、日韓プログラム）で虹野大学（仮名）に留学してきた韓国人留学生である。

日韓プログラムとは、1999年から10年の年限を設けて実施されている学部留学制度で、日韓両政府が費用を折半し、毎年100名の高校卒業者を選抜して日本の大学の理工系学部に派遣し、4年間の生活を送らせるというものだ。4年間の学部生活に先立って、日本語および専門科目の予備教育を1年間（前半を韓国のキョンヒ大学で、後半を原則的に日本の配置先大学で）受ける。

第1期から第3期までは、配置先大学は、キョンヒ大学での予備教育中に実施される試験によって決まっていた。その後、日韓プログラム留学生としての選抜試験が配置先大学を決める試験も兼ねるようになっている[1)]。

今回ストーリーを紹介するのは、虹野大学に来た第1期から第3期15人の中の2人の男子学生（フン君、朴さん）[2)]である。彼らのストーリーは、ネットワークの構築の仕方や言語上達観など多くの共通点があったが、考察でみるように、ネットワークの中で日本語を話す自分をどうとらえているかという点で非常に対照的であった。彼らの共通点と相違点を考えることで、留学生のネットワーク構築の特徴、ひいてはライフストーリーに見られる外国語を話す自分らしさの一端を明らかにすることが二人を取り上げた狙いである。

虹野大学では、日本語と専門の予備教育が行われたが、学部レベルの予備教育であること、半年という期間、また年齢などが考慮されて、日韓プログラム留学生たち独自のカリキュラムが組まれていた。筆者は虹野大学に日本語講師として勤務したことがあり、今回の協力者の日本語予備教育に携わった。

インタビュー当時、フン君は修士課程に在籍中で、朴さんは学部4年生であった。

インタビューはすべて筆者が行った。使用言語は韓国語が主である。筆者が韓国語が話せる[3)]ということもあり、予備教育当時から、日韓プログラムの学生たちと教室外では、主に韓国語で会話をすることが多かった。予備教育終了後も、保証人が必要な時は連

絡があったり、キャンパス内で会うと「僕、彼女ができました」と報告してくれたりと、ある一定の距離を保ちながらも、親密な関係が続いていた。

今回の協力者には、筆者が直接調査依頼を行った。二人とも３回ずつ直接インタビューを行い、また補足的に電話で、またはメールで質問を行った。インタビューは、虹野大学内の空き教室、食堂横の静かな休憩室で行った。

各協力者と、インタビューの回数および時間は以下のとおりである。

表１　調査協力者とインタビュー回数

協力者	性別	インタビュー時の学年	インタビュー回数	各インタビューの時間
フン君	男	Ｍ１～２	３回	１回目62分[4]、２回目86分、３回目41分
朴さん	男	Ｂ４	３回	１回目67分[5]、２回目110分、３回目100分

本稿は博士論文作成のための調査の一部であり、調査の目的は韓国人留学生の日本語上達のライフストーリーを作成することである。したがって調査は、どのように日本語が上手になったのかその軌跡を聞くことが中心であった。

インタビュー終了後、韓国語による文字化とその訳を作成し、出来事を時間軸に並べ替え、日本語でストーリーを作った。インタビューの翻訳に際しては、意訳は避け、日本語として意味が通じる限り、協力者の言葉を残すように努めた。出来上がったストーリーはフン君と朴さんに返し、コメントをもらい、修正した[6]。以下の結果では、長い引用は行を変えて表記し、短い引用は文中にかぎ括弧をつけて挿入してある。

インタビューとは、インタビュイーが話題のコントロールなどの主導権を握る特殊な会話である（Kvale, 1996）ことから考えると、筆者の興味がインタビューそのもの、そしてストーリーの完成に大きな影響を与えていることは明らかである。その際、筆者が協力者の元教師であること、筆者と彼らの年齢には10歳以上20歳未満の差があること、筆者が大学教師ではあるが非常勤講師という周辺的位置にいるということ、大学という日本語が圧倒的に文化的資本をもっている場所で韓国語を使ってインタビューを行ったこと、筆者は韓国語ネイティブではないこと、筆者も長期にわたって海外で暮した経験を持っていることなどが大きな影響を持っていることが予想される。ストーリーについては彼らから確認を得ているとはいえ、彼らを表象しているのは筆者である。しかし、研究者自身を排除した研究はありえない。紙幅の関係上、本稿では筆者自身のストーリーを書くことはできなかったが、稿を改めてこの問題に向き合いたい。

4．結　果[7)]

4.1.　フン君

＜日本に来る前－数学ができる僕とちょっとワルの僕＞

フン君は、ソウル生まれ、ソウル近郊育ちだ。もともとは大人しかったフン君だが、中学の頃から「大げさに言うと、生きる目的が親から友だちに変った」。そして友だちに認められようと、「前に出る」性格になっていった。高校に入ってからは、友だちを先導して、授業を抜け出しパンを買いに行ったり、授業後の自律学習[8)]を抜け出して、校庭で遊んだりした。高２の頃からフン君を入れて４人の友だちがいつもいっしょに動くようになった。勉強は高３になったらするつもりで、思い切り遊んだ。４人で放課後校庭で寝転んでビールを飲んだり、夏休みには「塾に行って何になる。いい大学に行って何になる！」とうそぶきながら、補習授業をさぼってソウルに遊びに行ったりした。今でも韓国に帰るとその子たちと酒を飲んだり、町をぶらぶらして遊ぶ。フン君がそんな風に遊ぶことについて、両親は何も言わなかった。父親は「若いときは経験がすごく大切だ。何でもしてみろ」という哲学を持っている人なので、成績さえ悪くならなければ何も言わなかった。フン君も定期テストの前は一生懸命勉強して、結構いい成績だった。その頃は「ただ勉強は（無理はせず）するだけして、その成績に合わせて大学に行かなくちゃ」と思っていた。

フン君がもう一つ好きだったものは、数学だ。よく考えてみると小学校５年生の時から数学の競技大会に出ていたから、小学校のころから数学が好きだったのかもしれない。高校の時は全国大会で努力賞のような賞をもらったこともある。

高校１、２年の頃は、大学で数学科に入って数学を専門的に勉強するのが夢だった。でも数学科を出ても就職できるところと言えば高校の先生ぐらいだと、先輩や数学の先生が教えてくれた。フン君は数学を専門にすることをあきらめた。空軍士官学校に行くという友だちといっしょに、士官学校に行こうとも思ったが、先生にも両親にも反対された。結局、工学を専門にすることにした。

３年生になると、フン君も一生懸命に勉強しだした。全国の中で１％以内の成績をとったこともある。一生懸命勉強していたある日、学校の掲示板に日韓プログラムのお知らせが張ってあった。別に外国に行きたいとか、留学してみたいと思ったことはなかったのだが、フン君は先生に「受けます」と言って、試験を受けてみることにした。

試験には受かった。それがわかってからは、勉強に力が入らなくなった。自律学習の時間も、「雰囲気を乱さないで、帰って遊べ」と先生に言われた。修能試験[9)]も受けたのだ

が、あまりいい点数ではなかった。「浪人するのがいやだったから」仕方なく、日本に来ることにした。

＜虹野大学に来てから－サークルでの疎外感と韓国人との付き合い＞

キョンヒ大学と虹野大学での1年間の予備教育期間を終え、次の4月に虹野大学に入学した。虹野大学では日韓プログラムの子たちと寄宿舎に住んだ。入学する前は、自分の日本語力にそれなりの自信をもっていた。しかし、授業に出てみると、教授が何を言っているのか何もわからない。レポートの締め切りも聞き取れなかった。レポートの締め切りや宿題などは、一人だけ声をかけやすい日本人の学生がいたから、毎日その子によく聞いた。

「これは大変だぞ」と学校が終われば寄宿舎に帰って、日韓プログラムの子たちとご飯を作っていっしょに食べた後、9時頃から集まって勉強した。また、勉強だけではなくいっしょにドラマを見たり、テレビを見たりした。学校でも、

> 休み時間になったらJ（日韓プログラムの友だち）に電話して、「タバコ吸おう」ってタバコ吸って、それから各自授業に行って、夕方にはいっしょにご飯を食べて、ほとんどそうしてました。1年生の時はほとんど同じプログラムの子たちとしか遊びませんでした。

授業以外には、最初は「面白いかなと思って」あるサークルに入った。しかし「完全にオタクの雰囲気で、1回だけ行って、あとは行かなかった」。その後ある人に誘われてテニスサークルに入ったが、1ヶ月でやめてしまった。

> おもしろくなくて。その時は率直に言って、日本語もダメだったし、行っても誰も話しかけてくれなかったし、話しかけてくれても返事できなくて行くのがいやだったんですよ。言葉ができなかったから。部とかに入ればみんな積極的だからおもしろいかもしれないんだけど、サークルとかは自分が行ってするものじゃないですか。だから、部とかは先輩が何か言ったりするけど、サークルは自分から話しかけなくちゃいけないでしょ。だから。ちょっと部に入ったら（体力的に）しんどいみたいだし、サークルはおもしろくなくてやってみたけどやめました。

2年生になって、フン君は日韓プログラムの子たちといっしょに引越しをした。引越し

先は日韓プログラムの後輩たちが住んでいるアパートで、各部屋でインターネットができた。彼らといっしょにインターネットゲームをして「朝４時までいっしょに遊んで、起きたら、（昼の）２、３時になった」。車を買った子もいたので、「夜中の12時ごろ、お腹すいたなって、夜景を見に行ってそのついでに何か食べてこようか」と近郊の夜景の有名な所に男ばかりで行って来たり、日韓プログラムのＪといっしょに夜中に車で中心街にある韓国式のインターネットカフェまで行ってゲームをし、明け方帰って来るという生活をした。１年生の時はあれだけ勉強したおかげでよかった成績が、２年生になるとかなり悪くなってしまった。

＜虹野大学での生活２－日本人の中で自分を出す＞

２年生の１学期に、日本人の友だち（Ａ君）が一人できた。Ａ君はある授業で知り合った子だったのだが、「急に韓国人の留学生もいるんだから、韓国語でも習おうって言い出した」。フン君も授業もそっちのけで、「韓国ではこう表現するって教えてあげたりした」。そのおかげで彼とはすごく親しくなった。

Ａ君は自分では「本当に日本人みたいな性格だ」という。でも、フン君から見たら、どことなく韓国人のような感じもする。

> 僕に合わせてくれているのかもしれないけど、僕といっしょにいるときは、韓国人みたいな性格だとよく思ったんです。何か一つにとらわれたら、それ一つだけ一生懸命する。そんな子だから、韓国にはまっているときは、学校にも来なかった。すごく酒も好きで、酒を飲みながら、（フン君が）キムチがすごく辛いっていうと、いっぺんにたくさん食べます。食べれないと思ってるんじゃないかって。その後で、辛いって水を飲んで。そんな子。

Ａ君は偶然、「あんまりマジメな子」ではなく、友だちも多くて「よく集まって、よく遊ぶ子だった」。フン君はＡ君の知り合いとも友だちになった。彼らは集まって遊んだりサッカーの日韓戦がある時などにはフン君を誘ってくれるようになり、いっしょに酒を飲んでさわいだりサッカーを見たりした。

３年生になると今までのアパートからでて、大学の近くの民間のマンションに日韓プログラムの友だちといっしょに住むことにした。それまでは、授業が終わったら、家に帰って韓国人の友だちと遊ぶことが多かったのだが、家が近くなってからは、授業の後には日本人の友だちと卓球をしたり、いっしょに試験準備のためにファミリーレストランで勉強

するようになった。

> まあコンピューターの歴史とか、覚えなくちゃいけないじゃないですか。そんなのは友だちにお願いして、ハハ数学は僕がするって。（中略）数学の場合は理解ができなかったら勉強にならないでしょ。だからみんないっしょに勉強するんですよ。で理解できた人が説明してあげるんですよ。そんなふうに、勉強するんですよ。（中略）それから勉強するのが面倒くさくなったら、友だちがお父さんの車持ってきて、どこかに遊びに行こうって。

フン君の日本語はその頃大幅に伸びた。

それ以前は、学科の飲み会などにいっても、正直に言って聞いてばかりで面白くなかったが、日本語ができるようになってからは、積極的に話すようになった。学科の友だちは「おまえはそんな子だったのか。今まではすごくおとなしい子だと思っていた」と言い、友だちのフン君を見る目が変わった。

合コンにもよく呼ばれた。「留学生ネタを使ってその場を盛り上げろ」というのだ。合コンでは、最初はお互いに何を話していいのかよくわからない。でも、留学生が一人いると、しばらくその留学生に質問が集中して、そのうちに場がなごやかになっていく。フン君は日本にいる間に日本人の女の子と一人ぐらい付き合ってみたいと思っていた。あれほど合コンに出たのに、「外見も性格も」気に入った女の子はおらず、その子たちがオーバーな話し方をするのが好きじゃなかった。

友だちから、「低級な」日本語も習って、今フン君の話す日本語は虹野方言になっている。友だちからは、話すと普通だが、文章を書くとおかしいといわれる。

＜研究室の中の僕＞

４年生になってから、研究室が決まった。その研究室はフン君が希望を出した研究室で、工学の中でもどちらかと言えば、数学と関係が深いところだ。理論を中心に勉強しているため、「自分で調べて答えを出せばいい」という雰囲気で、何日か学校に来なくてもそれほど問題にはならない。

その研究室の中でもフン君は日本語をたくさん習った。研究室の人と話したり、発表の準備などをして日本語がまた伸びた。特に体育会出身の先輩の影響が大きい。研究室には、フン君と先輩しかタバコを吸う人がいない。研究室は禁煙なので、よく先輩に「フン君行こう」と誘われて、１時間に１回ずつぐらいタバコを吸いに喫煙所まで行った。それ

に彼は酒をよく飲む。飲むと他の人にも勧めるという典型的な体育会スタイルだった。でも、研究室の中で、その飲み方に合わせられるのはフン君一人だった。

僕の研究室で飲み会をしても、みんなあんまり飲まないんだけど。韓国人の学生はすごく酒たくさん飲むじゃないですか。そんな飲み会したら、飲めなくても無理やり飲むじゃないですか。僕が同じように飲んだら、運動をした人から見ればすごくいいんですよ。ウワーッと注いで回るじゃないですか。それに合わせていくのが僕しかいないから。そこでもすごく気があって･･･。

先輩はフン君のことをすごくかわいがってくれた。夜12時ごろになると、近くの飲み屋に連れて行ってもらった。飲み屋では、絶対先輩がおごる。２次会はフン君が出そうとするのだが「怒るぞ」といわれ、結局先輩にいつもおごってもらった。フン君には、すごく韓国人のような人に思えた。

飲み屋では色々な話をした。

何ていうのかな。今までとは違う日本語を話さなければならなくなりましたよ。感情表現もしなければならないし。１対１で酒を飲んだのは、韓国語が好きだという子（Ａ君）とその先輩しかなかったんです。韓国語が好きだっていう子と酒を飲むと、韓国語だけ教えてあげたんだけど、その先輩と酒を飲むと、色々と小さいことまで、だから、くだらないことまで全部話さなくちゃいけないでしょ。それで表現をしようとしてたら、すごく伸びたと思います。それに酒を飲んだら、また言葉がうまく出るじゃないですか。

そんなふうにしていると、だんだんと日本語が上手になってきた。先輩は、もう卒業してしまった。先輩からは、「飲み会の火を消すな」と言われた。今、研究室の宴会係はフン君が担当し、あまり飲む人がいなくても、必ず「飲み放題」をつけるなど、伝統を守ろうとしている。また、先輩が就職した会社に引っ張ってくれるという話もある。

＜フン君の今＞

今、フン君は自分が日本語を話していても、韓国語の方言を話しているように感じる。

最近は、日本語っていうのが、なんていうか、何か外国語だっていう感じがあまりし

なくて、ただ地方の方言を使っているような感じがするんですね。だから、僕は日本語を習った時、本を見て勉強しませんでした。ただ他の人と同じように単語帳を作ったりしなくて、そのうち伸びるだろうって、何もしなかったから、文法とかをたくさん間違えます。最近日本語を話す時、考えて話すことはほとんどないですね。ただ出るまま話すんですね。だから友だちがどうしていつも方言を使うんだって。フフそんなのを考えてみると、本で勉強したのとは違って、そんなふうに習ったから、何ていうかな、外国語っていう感じよりは、日本っていう地方に来たのだから、方言も使わなくちゃ。もしプサンに行ったらプサンの方言を使うじゃないですか。そんなふうに考えるんですね。

ただ、韓国人と日本人では、フン君の受け止められ方は違うようだ。日本ではＢ型にみられ、韓国ではＡ型に見られる。Ａ型の性格というのは、小心で怖がりで、きっちりしている。Ｂ型は「ちょっと大胆で個人主義」だ。フン君は自分でみたところは、「きっちりしたところを抜いての」Ａ型だが、他の人の見方に合わせて、「韓国ではそうではないのに、日本ではオーバーにするところがあるみたい」だ。

フン君は実は、昨年、韓国企業の面接を受け、合格した。修士を修了したらその会社に就職する。その会社で３年働けば、兵役は免除される。フン君は、その３年間で自分が将来したいことを考えようと思う。どちらにしても修士だけでは、大企業の中で生きていくのは大変だ。兵役の代わりの３年が終わったら、博士課程に入るために日本に戻ってくるかもしれない。帰ってくるのだったら、知り合いもいるし、虹野大学に帰ってきたいと思っている。

4.2.　朴さん

＜エジソンみたいに一生懸命に研究して機械を作ろう＞

朴さんの両親は教育熱心で、朴さんは小学校のころからスポーツや音楽などの習い事、家での勉強などをしなければならなかった。

学校が休みになると、遊びに行きたくても、両親が問題集を１、２冊買ってくるんですね。その日に決められた分量を解かなければ遊びに行けないって。そしたら、遊びに行きたい一心でするんですよ。ぱーっと。

彼が幼かった時、他の人と違っていたのはその点だけで、それ以外は友だちと遊ぶのが

好きで、あちこち走り回ったり、サッカーをしたり、ゲームをしたりしていた。

ある時、エジソンの自伝を読んだ。

朴さん：７歳の時かな。エジソンの伝記を読んだんです。エジソン
筆者　：あー。
朴さん：それを読んで、あー科学者になろうかなって。ハハハハハ（後略）
筆者　：でも、エジソンのどこがよかった？
朴さん：一生懸命してるんですよ。
筆者　：エジソンが？
朴さん：だから、自分が考えたことを作ろうとして、一生懸命一人でしたんですね。
根気があるように見える人。

そのときから、朴さんは科学者になることにした。その中でも、機械を作りたいと思うようになった。

中学生の時も高校生の時も、昼間は学校で友だちと遊んでいたが、夜には塾に通い一生懸命勉強した。高１の時は、遠足の日に合コンを企画したり、クラスで旅行に行ったりしてよく遊んだ。しかし、高２でガールフレンドと別れてからは、「入試モードに入り」、遊ぼうという友だちを振り切って勉強を続けた。一時は低迷した成績も、そのおかげでバッとあがった。

高３のある日、日韓プログラムのお知らせが学校に来て、担任の先生からその試験を受けてみるように勧められた。あまり気が進まなかったが、先生や父親の友だちから強く勧められてテストは受けるだけ受けた。しかし、日本に行くつもりは全くなく、修能試験に向けての勉強を続けていた。

大学受験の時、朴さんは進路をめぐって父親とぶつかった。韓国で尊敬される職業と言えば、政治家や医者、裁判官や弁護士などだ。工学部を出てエンジニアになっても、政治家などの意見に従っているというイメージが付いてまわる。朴さんの父親は、医者になれば、収入が保障されるからと医学部に行くことを強要しようとした。朴さんはそれには屈せず、結局理工系の学部に願書を出した。しかし、不運がいくつか重なり、朴さんは志望大学に落ちてしまった。浪人したとしても希望の学校に入れるという保証はなく、日本に来ることにした。

＜日本に来てから－韓国を離れて＞

半年のキョンヒ大学での予備教育を終え、同じく虹野大学に入った日韓プログラムの学生たちといっしょに、朴さんは10月上旬に虹野大学に来た。その時は、とても簡単な会話しかできなかったし、何一つ聴き取れずぼうっとしていた。この状況を打開するため、テレビでもたくさん見ようと、来てから5日目にテレビを買い、しばらくテレビをたくさん見る生活を続けた。1ヶ月ぐらいたつと、娯楽番組の中で面白いところで笑えるようになり、3ヶ月ぐらいで自分なりに聴き取れないものはないような感じになった。

4月から理工系の学部の1年生になった。しかし、先生の話はあまり聞き取れなかった。朴さんが授業中に寝ていたせいもあるが、1年生の時は宿題が何かすらわからないことが多かった。また、漢字の略字などを知らなかったため、先生が黒板に略字を書いたらわからないし、先生によっては汚い字を書く人もいて、本当に授業の内容を把握するのが難しかった。

一方で、体育の授業などを通して、日本人の友だちも少しずつできてきた。

> 体育がいっしょだったでしょ、僕と親しい子たちはほとんど。体育がいっしょだったんです。授業の時は騒がないでしょ。話をしないから。正直、親しくなる機会もないでしょ。だいたい授業が終わったら、疲れてみんな帰るから。体育の授業は、話をしながらそんなの（運動）をするから。

そのように親しくなった友だちに、授業の宿題箇所が分からなかったら聞いた。

> 友だちに宿題は何？毎日。でなければ、メールを送って宿題は何？ハハ。こんな風に宿題の話をしてて、主にそんな話をたくさんして。それから出席の話。ほとんどそんな水準。

また、たまには飲みに行った。でも、テレビとは違う日本人の学生たちの発音が聞き取れなかったし、自分が言いたいことも言えなかった。学生たちに「もう一度言ってくれ。もう一度もう一度」となんども繰り返してもらった。中でも最初に親しくなったH君は、特にアクセントの癖があって、聞き取りにくかった。

2年生になると、実験が始まった。体育で親しくなった友だちが実験でも同じ班になった。実験だから多くの話をするし、宿題やレポートを助け合いながら勉強するようになった。友だちがノートのコピーをするときに自分の分をしてもらったりもした。その代わ

り、朴さんは日韓プログラムの先輩からもらった過去問を提供した。

その頃、日本育ちの韓国人のガールフレンドができた。彼女は日本語も韓国語も上手だった。彼女は朴さんに日本語で話しかけ、朴さんは韓国語で話したり、日本語で話したりした。大学の友だちに対しては、「言葉がわからないからといって一つ一つ聞くことはできないし」、「勘・機転でやりすごすことも多かった」が、ガールフレンドに対しては、日本語がわからなければいつでも遠慮なく韓国語で質問できたし、それに韓国語で答えてもらったので助かった。

> だから、辞書で探せるものは探して。でも生活表現みたいなのは、探すのもあれだし、わからないのがあるじゃないですか。そんなのをガールフレンドに対して、「これ何？」「何言ってるかわからない」。友だちと会話しててわからなかったら、ガールフレンドに電話して「おまえが話して」って。ハハハハハ

と、友だちと話している途中や、契約などを交わさなければならないときにも彼女に助けてもらった。この彼女のおかげで日本語の単語や表現などが上手になったと思う。

また、朴さんは、機械部に入って機械を作ったり、何かを作れば単位になる授業があったので、自分で機械を作って提出したり、展示会に出品したり、自分のお金で機械をいくつか作り、知り合いにあげたりした。資金が続かず機械作りは止めているが、自分の体を動かして、苦労しながら作業し、完成したときはうれしい。

> する時は本当にしんどいんです。助けてくれる人もいなくて一人で。本を積んで読んで、一人で部品を買いに行って、一人で勉強して何ヶ月もかかかって、完成した時は気分がすごくよくて。そんなのを感じて（ここまで）来たかもしれない。

3年生になると、実験や試験がかなり多くなった。自分一人でできる量では到底なく、友だちと授業の後に講義室に残って、お互いにわかる部分を説明しあったりした。ガールフレンドとは、忙しくなったこともあり、別れてしまった。でも、その頃はいやでも一日中、日本語を使っていた。

> 僕が勉強したところは僕が知ってるから、僕ができるところもあるから、僕が説明してあげなくちゃいけないでしょ。そんな時は、そんな時になれば、日本語を使わなくちゃいけないから。汗をかきながら、うまくいえなくても、まあ説明して。どうにか

して。そんなふうに、日本語をたくさん使って。それからわからないところがあったら、聞かなくちゃいけないから。難しいところがあれば、また難しい言葉を使わなくてはいけないでしょ。そうしたら、そうなって。日本語をたくさん使うようになって。使わなかった言葉も使うようになって。

3年生になってからは勉強だけではなく、H君たちが作った運動サークルに朴さんも参加している。サークルの中で気の合う友だちもでき、節約も兼ね、学校に近い朴さんの家によく集まって話したり、酒を飲んだりする。

このようにガールフレンドができたことや、親しい友だちができたことによって、朴さんの日本語は上手になったと思っている。特に最近は、文法的におかしいところに気づくことができるようになってきたが、自分の日本語の実力が十分だとは思わない。専門の特に抽象的な内容については韓国語で読んだ方がわかりやすい。また、単語の勉強をしなかったから、聴き取れないところもあるし、病院などに行くとわからない専門用語も多い。

それに朴さんは日韓プログラムの友だちに比べて日本人の友だちと話す機会は多いが、いっしょに話していても、朴さんは結局聞く立場にまわっていることが多い。結果、だんだん性格が大人しくなってきた。日本語で話していると韓国にいるときとは違う性格になってしまう。

自信があるわけじゃないから、話すのに。だから話して中間でつまったら収拾するのもあれだし。できることを話すんですが、もともとは、人と話すとき、（韓国では）聞く性格じゃないんですね。僕が話す性格で、他の人の話をよく聞かないんですよ。でもここでは、言葉がちゃんとできないから聞くことになるんです。それから、知らない話題が出ることも多いから。正直に言って、韓国では、わからない話題が出てもだいたいなんとか聞けばわかるじゃないですか。こっちは話しても分からないから。誰かのことを話しているみたいだけど、それはだれかな？それもわからないし。そうしたら結局、聞くことになるんですよ。そしたら段々段々聞くようになって、聞きながら笑っているんです。ウンウンウンウンって。そんなふうに変わるんです。僕は、心の中ではもどかしいでしょ。「チキショー、何か言いたいんだけど。」心の中では「でも、どうして話せばいいか分からないね。」それで止める時もあるし。一番大変なことは、言葉遊びするのがとても好きなんだけど、でもだめじゃないですか。ハハハ。わかりません。話さないで生きていたから、最近になって性格に大きな影響を受

けているような気もするし。昔の高校の時よりかなり静かになったと思う。

日本語で話す時はかなり静かになってしまう朴さんは、韓国に帰ると、その反動で爆発し、テンションがすごく上がるという。そのせいで、多重人格になったような気がする。日本での「静かな」朴さんは、「1年生の時からしてきたから、変えることができないんですよ。今になって」。だから、そのままでいることにしている。

しかし、サークルの中に、韓国にいる時のように振舞える友だちが一人いる。M君だ。M君はただの友だちの一人だったが、彼の失恋に立ち会ったのがきっかけで仲良くなった。また、彼は韓国に遊びに来て、韓国での朴さんを見た。

その友だちには私がぱっと叩いたり、いたずらしたりして、言いたいことが言えます。（中略）M君は韓国に来たんですよ。韓国に来て、僕の性格を見たでしょ。ハハハ

このようにM君とは親しくなったが、韓国の友だちに比べると「不足している」と感じるときがある。

どうしても日本語での意思疎通はちょっと落ちると感じられるでしょ。話していて時々もどかしくなったりしたときは、その場で韓国の友だちに電話します。韓国の友だちと話して。でなければ、友だちにメールとかを送って。なんとなく韓国に帰ってしまうときもあるし。

朴さんはあえて今、日本語の勉強をしようとは思わない。その理由は、単位も取れたし、日常生活に不自由しないだけではなく、朴さんが習いたい日本語は勉強してもできないからだ。

僕はもともと、韓国語で話すときは、汚い言葉をたくさん使うんですハハ。汚い言葉で始まって、汚い言葉で終わります（中略）。でも日本語ではできないじゃないですか、これが。知っているのがあまりないから。丁重な言葉になるし。フフフフフ。だから、気が狂うでしょ。「あーこれじゃないのに」って。これは勉強しても身につくものじゃないから。勉強して、身につけるものじゃなくて、もうちょっと、たくさん揉まれなくちゃいけないのに。（中略）もし、何も考えないで、遊ぶだけだとした

ら、半年あったら出来ると思うんだけどハハハ。

しかし、今は遊ぶための時間がない。日本語はこの程度にして、5年後ぐらいに資格が必要になったらまた勉強しようかと思う。

＜アメリカに行こう－将来のためにもうちょっと我慢しよう＞

朴さんは、卒業を目の前にして、自分の進路を決めなければいけない時期になった。

最近の韓国では、工学部の人気がずいぶん落ちていると言う。海外の大学で博士学位をとって帰ってきて民間の企業で研究員として働いていても、40歳ぐらいになれば、新しく入ってきた若い「博士」たちの技術についていけず、結局辞めなければいけない場合が多い。そのせいで工学部の人気が落ちているのだ。有名な大学でも定員割れしている場合もある。周囲の友だちも、工学部を卒業しても未来に希望が見えないと、一度入った大学を辞め、修能試験を受け、医学部に入りなおしたりしている。

それに今の韓国では、英語ができないと話にならない。TOEICが950点でも入社試験に落ちる会社があるほどだし、40代の会社員も昇進のために英語を勉強しているぐらいだ。

韓国社会の中には、アメリカの大学に入らなければ、社会から実力のある人間として認められない雰囲気もある。両親や周囲の人もアメリカに行ったほうがいいと勧めた。

お父さんの友だちの話では、アメリカのほうに行って来るのが、韓国では認められる。いくら東京大学が高いといっても、英語通が韓国では強いから、アメリカに行って来るのがいいみたい。

アメリカ行きを準備している韓国人の友だちの影響もあり、3年生の夏休みから英語の勉強を一生懸命し始めた。いろいろと悩んだが、今は、アメリカの機械工学関係の大学院に願書を出すつもりだ。そして、将来は「社会に出て活発に生きたい」と思っている。

実は、決してアメリカに行くことを心から望んでいるわけではない。うまくアメリカの大学院に入ったとしても、日本での体験と同じように、自分らしくいられるような人間関係が作るのは難しいと思うからだ。

僕が韓国にいたときは、この国を出て、どこか住みやすい快適なところで、映画を見たら出てくるでしょ、海があって、そんなところで暮らそうとか考えていたんですけ

ど、日本で得た経験とかそれからヨーロッパみたいなところに旅行に行って、そこで経験を得た結果、僕の性格で人がいないところでは住めないと思う。人がいなくて、それから日本語とか英語とかその言葉を使っては。だから僕の主な言語じゃないから。僕がむっちゃ上手だったらわからないけど、僕の考えを全部表現することができないのに、そんなところで人間関係を作っても表面的なものが多いみたいだし。

先日も、韓国の友だちから連絡があった。友だちの一人が徴兵を終え帰ってきたので、それを祝っての宴会があったのだ。

朴さん：友だちが毎日早く復帰しろって。
筆者　：韓国に復帰？
朴さん：僕だけがいないって。友だちはみんな宴会してるのに、僕だけがいないって。早く帰って来いって。そんなこと言われたら気が狂いそうです。ちくしょうって。
筆者　：そうだろうね。
朴さん：早く終らせなくちゃ。

このような状況は、朴さんにとって、「友だちとか社会と隔離されて、他のところで」生きていると感じられる。でも、今は社会で認められるために、アメリカに行ってもう少し頑張ろうと思っている。

でも人生のためにもうちょっと投資しよう。うんざりだけど。海外生活はもううんざりだけど。もう少し投資しよう。そう考えていくことで、そうでなければ行きません。

朴さんがアメリカに行くということを聞いて、H君やM君は「行くな」といい、勉強して何になるのだと言わんばかりに、友だち同士で遊んでいる最中に電話をかけてくるが、朴さんの決心は変わらない。最近はH君やM君が家に来ても居留守を使って会わないこともある。でも、アメリカの留学を目指している人は、日韓プログラムの中にたくさんいる。彼らと連絡を取り合って勉強している。アメリカだけではなく、ヨーロッパに行こうと思っている子もいる。

英語の試験がうまく行ってアメリカの大学院にさえ入れれば、「人生のゲームセット」

だ。当分の間、試験に関わる苦労はしなくていいと思う。

5．考　察

5.1.　日本語という文化資本を得る過程

5.1.1.　二人の言語上達観

上述したように、本稿は筆者が行った日本語上達のライフストーリーを聞くというテーマのインタビューがデータとなっている。言い換えれば、インタビューという場において、筆者は協力者である朴さんとフン君に「日本語が上手な自己物語」を構築してくれという依頼をしているのである。このような筆者の質問に答えて、朴さんもフン君も日本人の友人とのネットワークの話をしたことは、彼らの言語上達観を見る上で非常に興味深い。二人にとって、言語の上達とはとりもなおさず「話すこと」の上達を意味しており、しかも、それは友だちと話すことを意味していることがわかる。朴さんとフン君に共通するのは、日本語の上達とは、日本語の会話の自然さであり、それは、友人の多さと比例するものなのだ。

この語りは、ネイティブスピーカーとのネットワークが習得の鍵を握るという外国語／第二言語習得研究における語りと一致するものである。朴さんもフン君もそのマスターナラティブに合わせるように、自分たちの日本語の上達の軌跡を語っているということは、確認しておくべきことだと考える。

5.1.2.　キーパーソンとの出会い

二人の語りはどちらも、日本という異国に到着して日本語／虹野方言という文化資本を持たない周辺化された状況におかれた困難から始まっている。来日当初、思うように日本人学生とのコミュニケーションができない、授業中に宿題やレポートの締め切りなどがわからないという困難な状況に直面した。フン君も朴さんもそれぞれなんとかこの難局を乗り切り、単位を取ることはできたが、友だちはなかなかできなかった。友だちに話しかけられても聞き取れなかったし、話そうとしてもどう話せばいいかわからなかった。また、飲み会に行っても楽しくなかった。２年生になって朴さんは日本育ちの韓国人の彼女を得て、周囲の日本人にはできなかった日本語の質問もできるようになり、日本語が上手になっていった。同じようにフン君はＡ君という友人を得て、ネットワークを広げ、その中で日本語も上手になった。このように困難な状況は彼女とＡ君というキーパーソンとの出会いによって、次第に変化していった。

Laubscher（1994）は、ある一人のネイティブスピーカーとの接触によって、留学生はしばしばホスト社会との関係を構築することができ、また、一人の知り合いをもつことに成功することは、留学生の教室外での体験に大きな影響を与えることを指摘している。また、短期留学生と日本人とのネットワークについて調査した内海・吉野（1999）では、日本人が短期留学生の母国に興味をもっている場合、短期留学生は「情意フィルターを低くし、働きかけや情報提供を」しており（前掲論文：41）、ネットワークが強化されている場合が報告されている。フン君とA君の関係は、まさに、内海らのケースに当てはまるのであるが、フン君と朴さんの語りの中に現れる友だちは韓国に興味を持っている場合だけではない。フン君と朴さんの日本人とのネットワークをもう少し詳しく見てみよう。

5.1.3.　ネットワークの互恵性

フン君と朴さんが語った虹野大学における日本人学生とのネットワークは、全体的にみて互恵的な特徴を持っていることが指摘できる。

フン君は入学した当初、宿題やレポートの締め切りが聞き取れず困っていたが、その時のことをフン君は次のように語っている。

> 初めは友だちもあんまりいなかったし、友だち一人だけ知り合ったんだけど、その子にだけ申し訳なかったんだけど毎日聞いて、そうしていたんです。

この「友だち」との関係は決して互恵的なものではなく、フン君が一方的に情報の伝達を受けるという関係であった。引用の中でフン君が「申し訳なかった」と言っているように、フン君は決してこの関係を心地よいものだとは感じていなかった。これとは対照的に、A君との関係では、フン君はA君と日本語で会話をしたり、A君の友だちを紹介してもらったりするだけではなく、「韓国語」というフン君の母語の情報を提供できる関係であった。また、朴さんは、友だちからノートの提供を受けたり、出席やレポートの情報をもらう代わりに、日韓プログラムの先輩からもらった過去問などをクラスメートに提供していたと述べている。

このようなネットワークの互恵性という特徴は、日本人学生とのネットワークにおいて、フン君も朴さんも相手にとって価値のある、何らかの「文化的資本」を持っていたと言い換えることができる。同じことは、フン君と朴さんがレポートや宿題、実験といった活動を通じて広げたネットワークにも見ることができる。数学や物理といった特定の言語に支配されない理系の科目において、フン君と朴さんの物理や数学の「文化的資本」は十

分に価値をもったと推測される。そのような状況の中で、朴さんは、教わるだけではなく自分の解ける問題を教え、フン君はコンピューターの歴史など、フン君が苦手な科目について教えてもらう代わりに、数学を教えた。

これらのことから、ネットワークの中で提供される「文化的資本」とは、内海・吉野が述べている「母国の情報」などには限らず、日本に来てから得た「過去問」、物理や数学の問題を解く能力も含まれているといえる。

さらに、どの「文化的資本」が価値を持つかは、個々のネットワークの中で変わる非常にローカルな問題である。過去問や物理や数学の問題を解く能力などの例からもわかるように、大学、しかも学科内という特別な環境の中だからこそ、彼らの「文化的資本」は価値を持ったのだ。言い換えれば、ネットワークが互恵的であるということは、彼らの「文化的資本」が価値を持ったことの裏がえしなのであり、内海らが取り上げた「母国の情報」とは、あるネットワークの中で価値を持った「文化的資本」の一例であるということが指摘できる。

もう一つ付け加えておきたいことは、フン君と朴さんの日本人学生とのネットワークにおいては、彼らの「文化的資本」が価値を持ったのだが、そのことが、聞き手が聞くに値すると見なすだけの「正統な話者」としての位置を彼らに提供していたということだ。朴さんは試験の勉強のために日本人の学生と集まり、自分のわかる部分をしどろもどろになりながら日本語で説明したと述べているが、彼の文化的資本が「聞くに値する」正統な話者の位置を彼に与え、その位置に立つことによって、しどろもどろになりながらも彼は話し、そのしどろもどろの日本語が聞く価値を持つものとしてその場の日本人学生によって聞かれたといえるのだ。これは、フン君とA君の関係でも同じことが考えられる。韓国語の勉強がしたいというA君にとって、フン君は文化的資本を持ち、聞くに値する「正統な話者」の資格をもった人であった。このように「正統な話者」であることが、話すことを保証してくれる。上述した互恵的な関係というのは、実はネットワークに参加している双方に「正統な話者」という位置を保証し、話す位置を提供してくれているのだ。

5.2. 日本語を話す自己に対する認識

以上、フン君と朴さんのストーリーから、二人が日本人学生とネットワークを作っていく様を見た。二人の話は、最初の困難から援助者を得て次第にネットワークを広げ、「友だち」という互恵的な関係を作ることによって日本語が上達するという似た軌跡をたどっていた。

しかし、二人のネットワークの中での自己に対する認識は非常に異なっている。

フン君は、日本人学生とのネットワークの中では、最初は日本語ができず、大人しいと思われていたが、日本語が話せるようになってくると「お前はそんな子だったのか」と友だちに言われるほど「話にからんで遊べる」ようになった。そして、日本人の友だちの自分の評価に合わせて、わざとオーバーに「B型」っぽくふるまったり、「留学生」という役割を引き受けて座を盛り上げたりと、韓国にいる時の「典型的なA型」のフン君とは、若干異なった自分になっていると考えている。しかし、フン君は今、日本語を話していても韓国語の「方言を話している」感じしかせず、「自分ではない」と思うことはない。

それに対して朴さんは、日本語で話すと韓国語を使っている時のように、悪い言葉を使って冗談を連発することができず、「静か」で「丁重な言葉」を使う自分になってしまう。そして、そのような言葉を使う自分を「これは自分ではない」と思う。個人的には、M君やH君のように、韓国にいる時と同じように振舞える友だちもいるのだが、この「静か」で「丁重な言葉」を使う自分をなかなか変えることができない。

このように他の言語を使うことで、母語での自分とは異なる自分になっているという感覚は、多言語話者の自伝にかなり多く見られるものである（Pavlenko, 2006）。フン君も朴さんも、日本人学生とのネットワークで韓国語を話す時とは異なる自分になっていると感じているのだが、その感じ方は全く異なっている。これはなぜなのだろうか。

ここでは、この問題を考えるために、フン君と朴さんのライフストーリーを振り返り、彼らが考える「自分らしい」と考えられるネットワークの特徴を見てみよう。

5.2.1. ライフストーリーからみる「自分らしさ」－朴さん

この節では、朴さんから先に話をしよう。

朴さんのストーリーを読んで、まず気づくことは、そのストーリーには大きな流れがあるということだ。それは二つの糸からできている。一つは、エジソンのような科学者になることである。幼いころにこの目標を定めた朴さんは、父親の反対を押し切って工学部に進み、日本に来てからもエジソンのように「一生懸命一人」で機械を製作をした。もう一つは、「成功する」という流れだ。英語のできる人を無条件に優遇するという現在の韓国社会の趨勢のために、日本に留学している朴さんは、虹野大学で機械工学を勉強しただけでは、これら二つを両立できない状態になってしまった。アメリカの大学院に行って機械工学を専攻するという選択は、これら二つを両立できる地点に立つためだと言える。

この中心的な流れとともに、友だちとの関係が語られている。ストーリーの中では、朴さんは友だちと2種類の付き合い方をしているようだ。一つは、買い物に行ったり、飲みに行ったりという付き合い方だ。もう一つは塾で競い合いながらいっしょに勉強するとい

う付き合いだ。

筆者がここで注目したいことは、朴さんのストーリーの中では、「エジソンのような科学者になって、成功する」という未来が、遊ぶ友だちよりも優先しているということだ。大学入試の時やアメリカ留学に向けて勉強している現在、遊ぶ友だちは朴さんのストーリーからの退場を余儀なくされる。その代わり、いっしょに競い合いながら学ぶ友だちが重要になっている。朴さんは自分にとっての成功とは何かを具体的には話していないが、朴さんのストーリーでは、ひとまず「エジソンのような科学者になって、成功する」ことが彼のゴールであり、それに向かって走ることはストーリーの中で「朴さんらしさ」を作る一つの大きな要素になっている。

このような朴さんのストーリーの流れを、日本人の友だちは共有することはない。M君もH君も、他の運動サークルの友だちも、あまり勉強が好きではない。いわゆる「遊び友だち」である。また、筆者が韓国で工学部出身者が冷遇されているという事情を聞いて驚いた時、朴さんは「日本では、そんなことを考えないようだ」と日韓の事情の違いを説明してくれたが、筆者同様、M君もH君も韓国の事情には無知である。さらに、現在のところ、M君もH君も「アメリカに行く」という夢を朴さんと共有していない。

他方、日韓プログラムの中には、朴さんと同様、アメリカや海外に行こうと思っている人が多い。彼らも、現在英語を必死に勉強している。朴さんもアメリカに行こうとしている日韓プログラムの学生も、「英語を使って韓国社会で成功する」という同じ流れを共有しているということができる。朴さんの人生のゴールである「エジソンのような科学者になって成功する」という未来を共有できるかという点で、日本人の友だちと韓国人の友だちは大きく違う。

一方、遊ぶ友だちも「朴さんらしさ」のためには欠かせない存在だ。日本語を話す自分との対比の中で、朴さんは、韓国語を話すときは、悪い言葉を使いながら人をからかい、どんな話題でも合わせることができると述べている。また、中学・高校の時はよくそうやって友だちと騒いでいた。さらに、高校の時は他校との合コンを企画したり、旅行をしたりとクラスのリーダー的な存在であったことも述べられていた。朴さんが「帰りたい」というのは、このように悪い言葉を使いながら騒ぐ自分であり、そのように騒ぐ自分を認めてくれる友だちたちである。日本人の友だちとは、日本語のせいでいつも「静か」で「丁重な言葉」を使う朴さんになってしまう。今の朴さんにとって、未来の共有というだけではなく、遊ぶ友だちの中での「朴さんらしさ」も、日本人の友だちとは共有できないのだ。

5.2.2.　ライフストーリーからみる「自分らしさ」－フン君

一方フン君の場合はどうだろうか。筆者は、「数学」がフン君の一つの特徴として描かれていると考える。フン君は数学が好きであり、研究室の決定にも数学が関わってきている。しかし、朴さんと違ってフン君のストーリーでは、明確なゴールを見ることはできない。数学は一つの特徴であり、ゴールではない。ストーリーの中のフン君は、フン君のお父さんが言うように「色々な体験をして」いる最中であり、ゴールを模索中である。

朴さんのストーリーの中では、友だちとの付き合いの中で「朴さんらしさ」が出ていたが、フン君の場合も、友だちとの付き合いの中で、「フン君らしさ」を見ることができる。

フン君は大人しい子どもだったが、友だちに認められたいと思うようになり、「前に出る」性格になっていった。フン君は勉強はよくできたが、決してガリ勉ではなく、「少しワル」だったのである。一方４人の固定した友だちグループの中では、無理に「前に出る」ようなことはせず、「小心者」のフン君でいる。小心者のフン君だけが本物のフン君だとは、フン君は言っていない。「小心者」だが「前に出る」フン君。そして酒好きで、勉強もするのだが、決してガリ勉ではないフン君。筆者にはこれらの「フン君らしさ」がストーリーの中で語られていたと思われる。

一方、日本の友だちはどうか見てみよう。ストーリーの中でフン君はＡ君を評して「マジメではない」と言っている。Ａ君は遊ぶのが好きで、韓国人のように「無理に」辛いキムチを食べたりする。また、研究室の先輩は、後輩におごる、タバコを吸う、宴会で酒をついで回ると韓国人のような振る舞いをすると評されている。Ａ君や先輩に対する「韓国人のようだ」というフン君の評価の中から、Ａ君や先輩といっしょにいるときに構築される「フン君らしさ」と韓国での「フン君らしさ」との一貫性を読み取るのは、あながち深読みとも言えないだろう。フン君に対する周囲の評価は違っているが、基本的なフン君自身を変えているとフン君は考えていないのではないか。

また、ストーリーの中でフン君の友だちは、フン君にとっての道しるべの役割もしている。フン君が「前に出る」ような性格になったのは、友だちに認められるためであったし、大学受験の時、空軍士官学校に友だちが行くと聞いて、いっしょに行きたいと、大切な数学を捨てようとしたほどだった。このように、フン君のストーリーは、友だちという大切な道しるべがいてこそ成立するのである。同様に、研究室の先輩は、「数学」というフン君にとって大切な特徴を生かせる道を知っている。将来日本に帰って来て自分の会社に入れと言ってくれるなど、道しるべの役割を果たしている。

この道しるべという役割は、実は、朴さんの箇所で見た「未来の共有」とつながる。フ

ン君にとって、この研究室の先輩とは、いっしょに酒を飲む中でフン君らしくいられるというだけではなく、大学院修了後という未定の未来の中で、一つの選択肢を提供してくれている。この研究室の先輩とは、未来もぼんやりとした形ではあるが、共有しているのである。

5.2.3. 第二言語を話す自分と「自分らしさ」

以上、フン君と朴さんのストーリーの流れ、そしてその中で描かれている韓国人と日本人との友だちとの関係という点から、フン君と朴さんの日本語を話す「自分らしさ」について考察してきた。まとめると、フン君と朴さんのライフストーリーの中では、どのような未来の自分を描くのか、また友だちとどのように遊ぶのかという2点が、自分らしさを考える際に重要なポイントとなっていた。朴さんにとって遊び方、未来という2点で日本のネットワークと韓国のネットワークは大きく違っていた。朴さんは韓国のネットワークのほうを自分らしいと感じ、日本のネットワークは自分らしくないと感じたのだ。また、フン君は、日本人とのネットワークの中でも、韓国人とのネットワークの中でも、遊び方だけではなく、未来も共有でき、少なくともこの2点ではフン君らしくいられたのだ。

ここから一つの仮説が提出できるだろう。過去と現在だけではなく、未来の自分も共有できるかどうかでネットワークの中で感じられる「自分らしさ」は変わってくるという仮説である。ライフストーリーの中に過去と現在、未来を結ぶ形で一貫性を持って現れるある人の物語的アイデンティティ（ガーゲン, 2004）の中で、日本における友人とのネットワークをどこに位置づけられるのかによって、「自分らしさ」を感じるかどうかが変わってくるのである。

6．結論とまとめ－自分らしいあり方を求めて

本稿では、朴さんとフン君のストーリーを紹介し、日本人の友人とのネットワークの特徴を、「互恵的」という点、また遊び方と未来が友だちと共有されているかによってネットワークの中で感じられる「自分らしさ」が左右されているという2点について見た。
朴さんとフン君のストーリーから学べることは何なのだろうか。

筆者は、ネットワークを作ることとは、非常に偶然に左右されているということだと考える。フン君も朴さんも「互恵的」なネットワークを作ることができたが、それはフン君と朴さんが、大学の学科という場で通用する「文化的資本」を持っていたためである。このように文化的資本の価値はローカルに決められるものだ。それに加えて、そのような

ネットワークの中で、構築されるアイデンティティをどう感じるのか、これは本人の「自己」の問題であり、それを予測することは非常に困難である。

筆者は日本語教育に日本語教師として携わっているが、日本語学習者に日本社会とよりよい関係を結びネットワークを作ってほしいと心のどこかで思っている。同国人とのネットワークに閉じこもる学生を見て「何のために日本に来たのか」と思うこともある。この願いやもどかしさは、学会論文などで見かける「コミュニケーションを円滑に行うために」と銘打った論文の筆者たちとも共通しているかもしれない。

しかし、日本語教師としての自戒を込めて言うのであるが、本稿で見たように、ネットワークを作ることはスキルではない。ましてや教えられるものではない。ネットワークで常に交渉されているアイデンティティ、また彼らの過去と未来をつなぐアイデンティティが、そのネットワークとの関係の仕方を規定しているのだ。日本人とのネットワークを作ることが言語習得に大きな役割を果たすことは否定できないだろう。しかし、私たち教師は教室で、単に上手なコミュニケーションの仕方を教えるだけでは、彼らのネットワーク作りを支援したことにはならないのではないだろうか。

今後は、ネットワークの中で日本語を話す「自分らしさ」を規定するものは何なのか、より詳しく明らかにしていく必要があるだろう。また、日本人だけではなく韓国人のネットワークが協力者の生活で大きな位置を占めていることがわかったが、それが具体的にどのような意味を持つのか、彼らの視点から明らかにすることはできなかった。特にインターネットを使ったゲームや母国の友人との連絡なども、現代の留学生の特徴であろう。今後の課題としたい。

謝辞：院試、実験と忙しいにも関わらず、嫌な顔を見せずに調査に協力してくれた朴さんとフン君に心から感謝を申し上げます。

【注】

1）日韓プログラムの学生の中で兵役がしばしば話題になる。韓国は26ヶ月の男子皆徴兵制をとっているため、この義務をどの時期に、どのような形で果たすのかは大きな問題であり、大学院進学、就職などすべてにわたって影響を及ぼしている。韓国の大学に進学している男子学生は、一般に大学1、2年生頃に休学して兵役に行く。本プログラムに参加している者は、休学すると奨学金の受給が受けられなくなるため、韓国の大学生と同じように休学することはできない。筆者が知っている限りでは、学部4年を終えて兵役に行く以外にも、理工系の場合、韓国内の特定の大学院に行けば兵役が免除される場合がある。また直接兵役につかなくても大学、大学院修了後、特定の会社で一定の年数働

けば、兵役の代わりになるなどの制度もある。

2）協力者はすべて仮名。尊称を含め仮名は協力者がつけた。

3）筆者は4年間韓国で大学講師として勤務し、その間に韓国語を学んだ。公的な資格としては、帰国後、通産省の観光通訳試験に合格している。

4）このインタビューでは、空き教室に向かう途中で同じプログラムの後輩に出会い、同席することになった。後輩は、インタビューが行われている席から離れた窓際で外を見ていたり、携帯電話を使って何かをしていた。後輩が同席したことは、インタビューの内容に全く影響がないとは言えないが、1回目のインタビューが比較的短時間だったこと、1回目とその後の2回のインタビューで内容に大きな変化が見られなかったこと、作成したストーリーのチェックを受けていることなどから、1回目のインタビューのデータを使うことにした。

5）このインタビューでは、インタビューを行っていた空き教室に同じプログラムの後輩が入ってきて、インタビューが中断した。その後輩は私がかつて担当した学生だった。

6）韓国語の文字化は、韓国語母語話者に依頼した。それを筆者がもう一度確認した。

7）ストーリーを書くにあたっては、インタビューの翻訳は筆者が行った。またストーリー中ボールドの文字は日本語で話されたことを意味している。

8）大槻（1997）によると、1990年代初頭の高校生の生活はこうである。「たとえば、彼らは学校で正規の授業をうけているが、それが終わるのは午後三時～四時になる。それから受験科目を中心にした補習授業としての「補充学習」をうける。それが終わると六時前後になる。学校で夕食をとるが、そのために生徒は毎日昼と夜の二食分の弁当を持参する。夕食後「自律学習」と称する教師の監督下の自習を行なう。この自律学習は、生徒の自由ではなく、学校によっては強い統制下におかれる。自律学習を行わない者はその理由とともに父母の承認をうけて学校に提出しなければならない、という。こうしてすべての学校での勉強が終わると九～十時になる。それから帰宅し、さらに努力家は地域のレンタル学習室に行く。そこには他の高校の受験生も来ており、相互の情報交換をして刺激になるという。これで一日の勉強が終わるが、そのときはすでに夜中の十二時をすぎる。翌朝はまた学校に行かなければならない。･･･これが普通の高校生の受験生活である。」（大槻，1997：64）

9）日本のセンター試験のような全国統一の試験。修能試験の結果を見て願書を出す。大学によっては修能試験の点数と内申だけで合否判定をするところもある。また大学独自の試験を実施する大学もあるが、面接のみであったり、比率が非常に低かったりと、実質的には修能試験が希望大学への合否を決定すると考えてもいい（有田，2006）。

【参考文献】

浅野智彦（2001）『自己への物語論的接近－家族療法から社会学へ』勁草書房.

有田伸（2006）『韓国の教育と社会階層－「学歴社会」への実証的アプローチ』東京大学出版会.

内海由美子・吉野文（1999）「短期留学生の日本語実際使用場面の実態と分析－ネットワークの観点から」『千葉大学留学生センター紀要』第5号30-55.

大槻健（1997）『韓国の子どもと教育』あゆみ出版.

ガーゲン、ケネス（2004）『社会構成主義の理論と実践－関係性が現実をつくる』永田素彦、深尾誠訳　ナカニシヤ出版.

桜井厚（2001）『インタビューの社会学－ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

日本語教育学会（1996）『国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究－中間報告書』平成7年度文化庁日本語教育研究委嘱.

日本語教育学会（1997）『国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究－最終報告書』平成8年度文化庁日本語教育研究委嘱.

フランク、アーサー（2002）『傷ついた物語の語り手－身体・病い・倫理』鈴木智之訳　ゆみる出版.

保坂裕子（2000）「多声的時空間におけるアイデンティティの構築－アイデンティティ研究におけるナラティブ・アプローチの可能性について」『京都大学大学院教育学研究科紀要』京都大学大学院教育学研究科　46号425-437.

広崎純子（2005）「学校教育における日本語教育の一側面－中国帰国生徒の学校体験をめぐる語りから」『紀要』早稲田大学日本語研究教育センター 18号49-65.

八木真奈美（2004）「日本語学習者の日本社会におけるネットワークの形成とアイデンティティの構築」『質的心理学研究』第3号157-172.

リクール、ポール（1987）『時間と物語Ⅰ－物語と時間性の循環／歴史と物語』久米博訳　新曜社.

リクール、ポール（1990）『時間と物語Ⅲ－物語られる時間』久米博訳　新曜社.

Bamberg, M. (2004, September). Small stories in the lives of adolescents. ナラティブ心理学バンバーグ教授・公開講演会　科学研究費プロジェクト「フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法」2004年9月28日　京都大学.

Choi, J. E. (2002). Blending oil into water: Making the invisible visible and giving a voice to the silenced. In F. Tochon (Ed.), *The Foreign Self*. (pp.31-62). Madison, WI: Atwood.

Freed, B.F. (1998). An Overview of issues and research in language learning in a study abroad setting. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad,* 4, 31-60. Re-

trieved August 7, 2006, from
http://www.frontiersjournal.com/isues/vol4/index.htm

Kinginger, C. (2004). Alice doesn't live here anymore: Foreign language learning and re-negotiated identity. In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of Identities in Multilingual Context.* (pp.219–242). Clevedon: Multilingual Matters.

Kinginger, C. & Farrell Whitworth, K. (2005). Gender and emotional investment in language learning during study abroad. *CALPER Working Papers Series, No.2,* The Pennsylvania State University, Center for Advanced Language Proficiency Education and Research. Retrieved August 7, 2006, from
http://calper.la.psu.edu/publications.php

Kline, R. (1998). Literacy and language learning in a study abroad context. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad,* 4, 139–165. Retrieved August 7, 2006, from
http://www.frontiersjournal.com/issues/vol4/index.htm

Kvale, S. (1996). *InterViews: An Introduction to Qualitative Research Interviewing.* Thousand Oaks, CA: Sage.

Laubscher, M. L. (1994). *Encounters with Difference: Student Perceptions of the Role of Out-of-Class Experiences in Education Abroad.* Westport, CT: Greenwood Press.

Norton Peirce, B. (1995). Social identitiy, investment, and language learning. *TESOL Quarterly,* 29 (1), 9–31.

Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change.* London: Longman.

Norton, B. (2001). Non-participation, imagined communities and the language classroom. In M. P. Breen (Ed.), *Learner Contributions to Language Learning: New Directions in Research.* (pp.159–171). Harlow: Person Education Limited.

Novitz, D. (2001). Art, narrative, and human nature. In L. P. Hinchman & S. K. Hinchman (Eds.), *Memory, Identity, Community: The Idea of Narrative in the Human Science.* (pp.143–160). Albany, NY: SUNY.

Pavlenko, A. (2004). 'The making of an American': Negotiation of identities at the turn of the twentieth century. In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of Identities in Multilingual Context.* (pp.34–67). Clevedon: Multilingual Matters.

Pavlenko, A. (2006). Bilingual selves. In A. Pavlenko (Ed.), *Bilingual Minds: Emotional*

Experience, Expression and Representation. (pp.1–33). Clevedon: Multilingual Matters.

Pavlenko, A. & Blackledge, A. (2004). Introduction: New theoretical approaches to the study of negotiation of identities in multilingual contexts. In A. Pavlenko & A. Blackledge (Eds.), *Negotiation of Identities in Multilingual Context.* (pp.1–33). Clevedon: Multilingual Matters.

Polanyi, L. (1995). Language learning and living abroad: Stories from the field. In B. Freed (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context.* (pp.271–292). Philadelphia, PA: John Benjamins.

Schumann, J. (1978). The acculturation model for second-language acquisition. In R. C. Gingras (Ed.), *Second Language Acquisition and Foreign Language Teaching.* (pp.27–50). Arlington, VA: Center for Applied Linguistics.

Siegal, M. (1996). The role of learner subjectivity in second language sociolinguistic competency: Western woman learning Japanese. *Applied Linguistics,* 7 (3), 356–381.

Spolsky, B. (1989). *Conditions for Second Language Learning.* Oxford: Oxford.

Wilkinson, S. (1998). On the nature of immersion during study abroad: some participant perspectives. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad.* 4, 121–138. Retrieved August 7, 2006, from http://www.frontiersjournal.com/issues/vol4/index.htm

Weedon, C. (1987). Feminisit Practice and Poststructualist Theory. London: Blackwell.

（博士後期課程学生）

（2006年 8 月25日受付）
（2006年10月 5 日修正版受付）
（2006年11月 1 日再修正版受付）
（2006年11月16日掲載決定）